# イギリス科ニューズレター

No. 22 / Apr. 2014

教養学部教養学科地域文化研究分科イギリス研究コース
大学院総合文化研究科地域文化研究専攻小地域イギリス
〒 153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1（8 号館 402 号室）
Tel/Fax 03-5454-6304（イギリス科研究室直通）
Email: british[at mark]ask.c.u-tokyo.ac.jp
Web Site: http://british-section.c.u-tokyo.ac.jp

## 主任挨拶

後藤春美

2014 年 4 月から 2 年間、教養学科地域文化研究分科イギリスコースの主任を務めます後藤春美です。どうぞよろしくお願いします。

さて、この場をお借りしまして、近年私が関わりましたイギリスコース関連の出来事を 2 件ご報告いたします。一昨年秋、名誉教授の木畑洋一先生が紫綬褒章を受章されました。そこでイギリス科や大学院国際社会科学専攻で木畑先生の薫陶を受けた者が中心となって、昨年 1 月 27 日に内輪のお祝いの会を神楽坂のイタリアン・レストランで開催しました。当日は奥様の木畑和子先生も参加して下さり、中尾まさみ先生はじめイギリスコース運営に関わる教員や教え子たちが集まり、和やかで非常に楽しい会となりました。

2 つ目は、本年 1 月 10 日に開催されましたシンポジウムのご報告です。今年は第一次世界大戦の勃発から 100 年に当たります。そこで「第一次世界大戦とヨーロッパ　100 年後の今、振り返る」というシンポジウムを開催しました。京都大学人文科学研究所が招待したジョン・ホーン教授（トリニティ・カレッジ、ダブリン）、ジェイ・ウィンター教授（イェール大学）、オリヴァー・ヤンツ教授（ベルリン自由大学）という、

1 月 27 日　神楽坂にて

まさに斯界の権威を駒場にもお招きすることができ、コメンテーターは木畑先生にお願いしました。司会は名誉教授の草光俊雄先生、および大石和欣先生と私が担当いたしました。イギリスコースの 3 年生の中からも頑張って参加する者もおり、有意義な機会となりました。なお、この催しについては 1 月 18 日付の日本経済新聞朝刊 44 面文化欄で紹介されました。

近年は、駒場組織の細分化が進み、大石先生（言語情報科学専攻）のような、以前でしたら当然イギリスコースの教員となられる方が他の分科所属となる事態も起こっています。制約の多い中でも、できる限り高い学問のレベルを維持していけるように、諸先生方と努力して参りたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いします。

なお、本年 10 月 18 日（土）のホームカミングデーには、例年より規模の大きいイギリス科卒業生の集まりを予定しております。さらに、アメリカ科などでは同窓会組織を立ち上げたとのことです。イギリス科卒業生の皆様の中にも、同窓会をお手伝い下さる方がいらっしゃれば、ありがたく存じます。こちらもどうぞよろしくお願い申し上げます。

## 安西信一准教授を悼む

中尾まさみ

去る 2 月 10 日、本学大学院人文社会系研究科准教授である安西信一さんが 53 歳の若さで、くも膜下出血のため急逝されたというニュースは、多くの同僚、友人、そして教え子たちに言いようのない衝撃と悲し

みを与えました。

安西さんは 2002 年に総合文化研究科地域文化研究専攻に着任され、前期課程では英語、後期課程と大学院ではイギリス地域文化研究の講義を担当されました。2006、07 年度にはイギリス科主任も務められています。2009 年にご出身の人文社会系研究科美学芸術学専攻に移られましたが、その後も協力教員として総合文化研究科の授業担当と大学院生の指導を続けておられました。

故 安西信一准教授

ご専門はイギリスの庭園、とくに思想史に表れる庭園の意味の考察がその中心で、著書『イギリス風景式庭園の美学――＜開かれた庭＞のパラドックス』(2000) は、この分野を代表する名著であり、韓国語にも翻訳されています。その研究手法は緻密で堅固でありつつ同時にさまざまな領域への広がりの可能性を内包する刺激的なもので、まだ同僚になる前にこの著作を初めて読んだときの興奮を、私は今でもよく覚えています。

安西さんがジャズ・フルーティストとしてのもう一つの顔を持っておられたことは、よく知られています。また昨年出版されたＪポップのアイドルグループについての著書『ももクロの美学――＜わけのわからなさ＞の秘密』は、アカデミアの外にも多くの熱烈な読者を獲得しました。その活動の多彩さは私たちを驚かせましたが、安西さんご自身は、大学広報誌『淡青』第 28 号（発行は逝去後になってしまいました）で庭園とジャズとアイドル、この三つが「閉鎖的でエリート主義的な近代西洋美学」によって排除されてきた大衆芸術であるという共通点をもつことを強調しておられます。新たな地平をひらく自由さ、そして面白いと思った対象に徹底的に注ぐ情熱こそが、安西さんの研究の本質であったと改めて感じたことです。

安西さんは、いつお会いしてもあの人なつこい笑顔で気さくに接してくださいました。東京にこの冬二度目に降った大雪がまだたくさん積もっていた 2 月 16 日のご葬儀に、教員、職員、学生、卒業生を問わず、ほんとうに多くの人が集まったことは、いかに安西さんが敬われ、慕われていたかを物語っていました。もっともっと活躍していただきたかったし、また同僚として友人として話がしたかったのに、残念でなりません。心よりご冥福をお祈りいたします。

## 新任のご挨拶

Professor Catriona Elder
（オーストラリア客員教授）

As the Visiting Professor in Australian Studies at University of Tokyo I am deeply honoured to be able to introduce myself to the British Studies staff, students and supporters. The research I undertake often explores the connections between Australia, the United Kingdom and different countries in South, South-East and East Asia. As a result, working with, and being a part of, the British Studies “team” here at Komaba has been a very valuable part of my experience in Tokyo.

If considered from a geographic perspective my academic career has seen me moving steadily north! I am a graduate of the University of Melbourne where I undertook degrees in Commerce and Arts, with a specialisation in History. I completed a Master of Arts degree at La Trobe University and though I still worked within the field of History, my focus was on gender and feminist theory. For my PhD I enrolled at the Australian National University in Canberra. Here I extended my interest in gender relations, and began to explore the area that now frames my research – race relations. Located at the University of Sydney, in a Sociology Department I now teach and research on issues around racism, immigration, multiculturalism and Aboriginal Studies. To complete my northward trajectory I have the pleasure of working here at the University of Tokyo and deepening my knowledge about these topics in the context of Japan, but also through the British Studies Programme, in the context of British society.

My training and research reflects a quite diverse set of interests, but it was all brought together in my book - Being

Australian: Narratives of National Identity (Allen & Unwin 2007). Writing this book enabled me to think about the "big picture" issues that shape contemporary Australia. From here I have focused on some specific aspects of Australian life.

Two large collaborative projects are the focus of my research attention at the moment. Dr Daphne Habibis, Professor Maggie Walters, Penny Taylor, the Larrakia Corporation in Darwin and I are exploring Aboriginal peoples experiences and attitudes to Euro-Australians. The second project focuses on the topic of war and race. Alongside Dr Vicki Grieves and Dr Karen Hughes, I am investigating the experiences of children born of interracial sexual relationships in World War II Australia. This project extends some earlier work I did on war and migration. Some of my findings are published in the article 'Japanese "Orphans" and Belonging: Children Immigration and "White Australia" Australian Historical Studies October 2007).

Another exciting project that engages me is a new Indigenous Research Network (http://www.wun.ac.uk/research/Indigenous%20Research%20Network). A team of scholars from the University of Sydney helped establish this global network and it now involves dozens of scholars from nine international universities. This interdisciplinary group of Indigenous and non-Indigenous academics is sharing their research and designing new projects in order to develop new methodologies and theories to support Indigenous knowledge production and collaborative research projects that will enable the flourishing of Indigenous communities around the globe.

## 二律背反を超えて

浜島暁達

2013 年 3 月卒の浜島と申します。卒業後はベンチャー企業で社会経験を積み、いつかは英語圏で修士号を取得したい、と考えておりましたが、その「いつか」のオファーが卒業後 1 か月でやってくることとなりました。2013 年 9 月 に Trinity College Dublin にて Conflict Resolution and Reconciliation の研究科に配属され、イギリス科在籍中から取り組んでいた北アイルランド問題についての考察を進めております。

大学名には「ダブリン」と入っているのですが、研究生活の大半は北アイルランドのベルファストで過ごしております。この北アイルランドというのが非常に曲者で、イギリス領でありながら名前に負っているのは「アイルランド」。イギリスなのかアイルランドなのか。イギリスとしての側面を強調するとナショナリストから反論されますし、アイルランドとしての側面を強調するとユニオニストから反論されてしまいます。北アイルランド紛争それ自体は米国の協力などを経て 1998 年の和平合意に至りましたが、まさにその経緯の為に、今日でも俗に言う「意識の高い」米国人が数多く社会貢献のために北アイルランドにやってきて日々の活動に励んでおります。その結果、北アイルランドでの生活においては、ブリテン諸島の方々のみならず北米の方々とも常に関わり合いを持つこととなります。

英米愛が共存を模索する北アイルランドの中で日本人としての私の立ち位置はどこにあるのだろう、と毎日考えさせられます。ベルファストの市街地を歩いていても日本人とすれ違うことはまずありません。現地の方に「日本といえば？」と問いか

1990 年代から再開発が始まった、ベルファスト・ラガン川沿岸の再開発地域。ここから河口に向かって歩いて行くとベルファストの新名所であるタイタニックミュージアムが見えて来る。

けて帰ってくる答えは、予想通りスシかサムライかゲイシャ。お世辞にも東洋への理解が進んだ場であるとは言えません。しかしながら、沈思黙考の末、日本と北アイルランドの間にある共通点を 2 つ見つけました。

1 つ目は、「魚がおいしい」こと。北アイルランドの主要都市が海岸線から近いせいか、魚料理は鮮度が抜群でおいしいです。イギリスでの留学経験のある日本人は「イギリスの食生活はイマイチ」と評することが多いですが、こと北アイルランドにおいてはその限りではありません。

2 つ目は、「無常観」。生老病死がごく日常のこととして扱われている印象を受けます。ベルファストの街を歩いていて、ふと足下に目を遣ると、タイルに人の名前と日付が刻印させていることがあります。つまりその人がその日にそこで武装勢力の凶弾に倒れた・・・と。合意締結から 4 月で 16 年が経つのですが、紛争の記憶それ自体はそう簡単に拭えるものではありません。震災後の日本も似た足跡を辿るのでしょうか。

何はともあれ、今回の滞在では、色々と気付きの得られる機会が多いです。来て良かった、と心から思います。最後にイギリス科の在学生に一言申し上げるとしたら、「まだまだブリテン諸島から学べることは沢山あるよ。」とでもなるのでしょうか。

イギリス科よりご案内

## 2014 年度ホームカミングデー・イギリス科卒業生の集まりのお知らせ

来る 10 月 18 日（土）の第 13 回東京大学ホームカミングデーには、例年より規模の大きいイギリス科卒業生の集まりを予定しております。初夏に、正式なご案内をお送りする予定ですので、ぜひご参加ください。またこの機会に、同窓会組織立ち上げにご助力いただける方は、下記の卒業生連絡用専用アドレスにご連絡ください。

## 卒業生の方にお礼とお願い

昨年のニューズレターで同窓生の皆様にご支援をお願いしました後、多くの方から御芳志を賜りました。お名前を記すスペースがありませんが、深く御礼申し上げます。

「イギリス科ニューズレター」は、現在、紙媒体と電子媒体の 2 種類のやり方で、皆様のお手元にお届けしております。今回、紙媒体でお送りした方で電子化にご協力いただける方は、メールアドレスを卒業生連絡専用アドレス

**igirisuka[at mark]ask.c.u-tokyo. ac.jp**

（at mark は @, 研究室アドレスとは異なりますのでご注意下さい）までお知らせ下さい。

また、お届けいただいているご連絡先（住所、電話番号、メールアドレス）に変更などがおありの場合も、お手数ですが、上記アドレスまでご連絡をお願いいたします。

ニューズレターに関しましては、経費節減と環境・資源への配慮から電子化を進めておりますが、同窓会のご案内など郵送が必要なものもございます。郵送費の資金繰りは毎年厳しくなっております。同窓生のみなさまに引き続きご支援をご検討いただけますと幸いです。ご賛助いただけます場合は、以下の口座にお振込みいただけますようお願い申し上げます。

同窓会用の口座は、
**ゆうちょ銀行　口座名：イギリスカ**
**口座番号 : 10090-2-43621671**
ゆうちょ銀行の口座をお持ちの方は手数料に関しては ATM 無料、窓口 144 円
ゆうちょ銀行以外からの電信振込の場合は、手数料 540 円
ネット振込の場合は、口座番号が変わります。

- **■銀行名 ゆうちょ銀行**
- **■金融機関コード ９９００**
- **■店番 ００８**
- **■預金種目 普通**
- **■店名 〇〇八 店（ゼロゼロハチ店）**
- **■口座番号 ４３６２１６７**

どの銀行にお口座をお持ちかによりますが、手数料は無料あるいはゆうちょ銀行以外からの電信振込、郵便局の窓口振込よりもずっと安くなります。

---

**2014 年度イギリス科運営委員**

後藤春美（主任）、西川杉子（副主任）、アルヴィ宮本なほ子、小川浩之、中尾まさみ、加太康孝（教務補佐）